

7. 精神看護において学生のアセスメント力を高めるための演習を試みての 評価と展望

○木村 美智子, 石井 薫, 岡 須美恵 (関西福祉大学)

I. はじめに

精神看護を学ぶ学生に看護過程を教える際、教員は学生にどのように患者像を伝えるか難しく戸惑いを感じる。学生自身も具体的に精神疾患患者と関わった経験がなく、患者を想像することや精神看護ケアがどのようになされているのかイメージすることができない。そこで、今年度初めての試みとして、看護過程の情報収集場面で、教員が模擬患者とし授業に参加し、学生とロールプレイで、学生が患者のイメージをもち、そこから必要な情報を得ることができるように試みた。学生への患者情報は最小限にとどめ、不足の情報を学生自ら考え、模擬患者から情報を得るという方法を行った。

授業の試みの目標は、1. 学生の考える力を高める。2. 学生は精神疾患患者のイメージがもてる。3. 看護の対象者を生物学的側面・心理学的側面・社会的側面から捉え全人的に理解できる。4. 精神疾患による障害が生活する上でどのような影響を与えているのか自ら疑問をもち言語化できることとした。

II. 研究方法

1. 対象： 本学看護学部3年次生で精神看護論Ⅱを受講した84名
2. 精神看護におけるアセスメント技法の授業時間：平成25年6月7日～28日（8コマ）
3. 調査票データ収集期間：平成25年7月26日～8月2日
4. データ収集方法：精神看護論Ⅱ終了後に、看護過程に関連した内容の調査票を配布し、自由に記載。記載した調査票を専用ボックスに投函することで研究参加とした。
5. データ分析方法：「看護過程の情報収集」の方法についての評価を5段階で表し、学習効果についての内容や学生の意見などについて自由記載した内容を集約した。
6. 倫理的配慮：研究への参加は自由であることなどを書面と口頭で説明した。

III. 研究結果

84枚配布し47枚回収し回収率は56%であった。「看護過程の情報収集」の全体的な評価では、「大変良かった」が34%、「良かった」が49%、「まあまあ」が11%、「あまり良くなかった」が4%、「よくない」が2%であった。良かったと答えた83%の良かった内容は、「実習のイメージができた」「質問の仕方が分かった」「他の学生の仕方が参考になった」「自分で考えられた」であった。良くなかった点は、「質問しにくい」「時間がかかる」が主な内容であった。

IV. 結論

本研究の調査から、回収率の低さは、授業の内容が理解出来なかったことと、調査の時期が演習終了直後でないことが考えられた。しかし、「精神疾患患者のイメージがもてた」、「必要な情報を考えることができた」という意見から、教育効果はあったと考えることができた。次年度の課題として、よりアセスメント力を高めるには、視覚からの刺激を通して、患者のイメージがもてる工夫が必要である（生物学的側面、心理的側面、社会的側面からの理解）こと。イメージした患者から具体的なアセスメント技法の指導を行うこと。さらに、患者モデルを活用したロールプレイで再度アセスメントを行うこと。の必要性が見出された。